

オンライン環境を教室へ 情報通信技術活用の制約をどのように克服するか

山口博史

徳島大学大学院社会産業理工学研究部

1. はじめに

2020年初頭からの新型コロナウイルス感染症拡大により、大学の授業が広くオンライン化された。そのなかで、授業の担い手がかなりの違和感を覚える事例があったこと（村上 2021）が知られている。

こうした動きと並行して、オンライン授業をどのように行なうかについて、さまざまな試みが現場の教員から報告されてもいる。当「カンファレンス」においても多数のオンライン授業の実例が報告されていたことは記憶に新しい（徳島大学FD委員会（編）2022）。これらの試みには、オンライン授業がもつ課題面の指摘がしばしばみられる（たとえば飯尾（2021:75-119）など）。これらの指摘は報告者も当を得たものと考えるところである。同時に、オンライン化ないし、情報技術の導入により、教室での授業にあった非明示的「制約」を認識する契機になった面もあるのではなかろうか。D.レヴィはオンライン授業によって失われたものがあること（Levy 2020=2021:29-30）とともにオンライン授業の優位性があることを指摘している（Levy 2020=2021:51-52）。

この報告では以上の見方をもとに、オンライン授業の経験にもとづいた『血の通った』テクノロジー活用」（山口 2021）をめざしつつ、教室という環境が持つ制約およびその克服、また潜在力に関して参加者とともに考えてみたい。

2. オンライン環境を活かす

教室で可能なことであってもオンラインではうまくいかないことがあること自体はすでによく知られている。それではオンラインでは容易なことが教室では意外に実現が難しいということ

はあるものだろうか。報告者の限られた経験ではあるがいくつか例示してみたい。

まず思いつくのは授業内容についての学生側からの活発な質問・発言であろう。オンライン授業の際、報告者は「コメントスクリーン（<https://www.commentscreen.com/>）、以下『CS』」を用いることが多い。CSでは受講者が匿名で発言でき、その発言が全員の画面に表示される。受講者は疑問に感じたことや授業内容に関するコメント・感想を気軽に他の受講者と共有できる。よく知られているように、大学の授業で学生に発言を促しても不調に終わることは少なくない。匿名という安心感があるせいかCSを用いることで発言が活発になり、授業担当者としても授業内容に受講者の反応に応じた幅（基礎的な事項を詳細に説明したり、発展的内容を取り上げたりすること）を持たせることが可能になった。

またオンラインでは、活発なコメント往来につながるような授業前のウォーミングアップおよび機材の懸念を払拭するためのテストが比較的容易ともいえる。教室での授業においては、直前授業が内容の都合上延長している場合があり、教室入りのタイミングを検討せざるをえず、機材の活用に懸念が残る場合がある。これに対し、オンラインではこの種の制約がない。機材テストを兼ねて授業の5分前程度から早めにオンラインのルームを用意し、入場してきた学生らに季節の話題（授業開始以前に授業内容の本題には入らないように留意しつつ）などを報告者は語りかけていた。これは報告者の機材に関する懸念を軽減するとともに、学生の授業前のウォーミングアップになっていたようでもある。こうした授業スタイルは、オンライン環境にあることを活かす方向で考

えることが一定の成果をあげた事例ともみられる。

これらオンラインで活用可能なテクノロジーについて、教室では導入のハードルが依然としてあると報告者はみている。オンライン授業で得たテクノロジー活用のノウハウを教室で活かしていくための工夫について、参加者と議論を行なってみたい。

3. オンライン授業の技術を教室でも活用する

オンライン授業で用いていた技術をそのまま教室でも用いることも可能なケースがある。オンライン授業でよく活用されたことのひとつに「画面共有」がある。教室で授業を行なう際にも通信ソフトウェアを併用し、教室にいる受講者もインターネット経由で授業担当者のコンピュータに接続することで、授業担当者だけではなく、受講者のプレゼンテーションを「画面共有」することが可能である。これまで、受講者が授業内で発表をするときなどは、USBメモリーを用いたり、コンピュータとプロジェクターの配線をし直したりして意外に時間を要することがあった。教員の通信ソフトウェア画面をプロジェクターに映し、そこに教室から受講者の画面を共有することで大幅な時短が可能になる余地がある。受講者の手もとにプロジェクター投影画面と同じ内容が表示されるという意味も少なくない。

4. テクノロジーと「温故知新」

オンライン授業の優位な点の例として授業内容を録画して再視聴することができる点が挙げられる (Levy 2020=2021: 52)。報告者もこの点に反対するものではない。同時に、「動画」にこだわりすぎることもないのではないかと感じている。授業では積極的に教科書や課題文献を指定し、授業では先述のCS等を用いながら双方向性の高い授業を展開し、その解説や事前予習にもとづくワークを導入する(テキストをベースにした反転授業)という、かつての大学の授業にやや先祖返りしたような授業手法を考えてもよいのではなかろうか。動画は視聴に時間がかかり、また

単位時間当たりの情報の密度もそれほど高くはできない。教科書や課題文献は、順序だてて書かれており、予習時も復習時も要点や筋道を追いやすい。

また報告者がオンライン授業で痛感したのは教室に備えられている「黒板」の持つポテンシャルであった。オンライン授業でもある種の機能的等価物を提供することはできたが、教室にある「黒板」の持つポテンシャルについて、再評価・再解釈する必要があるものとみられる。

5. オンライン授業の知見を教室へ持ち込む工夫

当日は以上の事例のほか、オンライン授業で得た知見を教室に持ち込む際に考えられる工夫についての考察を行なう。そのうえで教室の持つ「限界」や「制約」を乗り越えること、そしてそのポテンシャルについても参加者と議論を行ない、教室という空間の再解釈につなげてみたい。

【参考文献】

- 飯尾淳, 2021, 『オンライン化する大学: コロナ禍での教育実践と考察』 樹書房.
- Levy, Dan, 2020, *Teaching Effectively with Zoom: A Practical Guide to Engage your Students and Help them Learn (2nd edition)* (川瀬晃弘 (監訳), 2021, 『ハーバード式 Zoom 授業入門: オンライン授業を効果的に支援するガイド』 青弓社) .
- 村上玄一, 2021, 『ZOOM に背を向けた大学教授: コロナ禍のオンライン授業』 幻戯書房.
- 徳島大学 FD 委員会 (編), 2022, 『令和3年度全学FD推進プログラム 第17回大学教育カンファレンス in 徳島 発表抄録集』 徳島大学FD委員会. (2022年10月30日取得, https://www.tokushima-u.ac.jp/fs/3/5/7/9/2/3/_/_-__3__17_.pdf)
- 山口博史, 2021, 『『地域交流研究 I』: 『血の通った』テクノロジー活用と大学での遠隔教育のありかた』 『地域交流研究年報』 17: 37-38 (2022年1月17日取得, <https://www.tsuru.ac.jp/uploaded/attachment/2651.pdf>) .